

第五矢 都には

——仁平元年（一一五二）六月十九日、有馬温泉・温泉寺

1

有馬は温泉寺の塔頭たっちゅうからは、山間に立ちのぼる湯煙が幾筋も見えた。

（まだ、生きているのか……）

広賢は痺れた腕を上げて、薄紫色になったわが手を見た。まだ怨おんの毒気は抜けていない。

サムハラサムハラの術を施している間は体が凍えそうだったが、今は高熱で頭がずしりと重く、全身もだるい。体が怨と戦っているせいだ。頭もぼんやりしていた。

足音がし、一人の男が視界を遮って座った。

「禁断の陰陽道の世界、たつぷりと楽しませてもらった」

臥所ふしどから見上げると、泰親が澄まし顔で真紅の鉄扇を開き、ゆつたりと扇ぎ始めた。

「小娘のほうは一度意識を取り戻した。気でも触れたように、そなたの生死を確かめていたがな隣に敷かれた褥しとねへ目をやると、由良が昏睡したように眠っている。

「後は温泉で、時を掛けて邪気を抜くほかあるまい」

戦いの日から三日三晩、安倍本家の陰陽師たちが術を施して広賢と由良を浄化し、有馬まで運んで湯治できるよう差配したらしい。

広賢の脳裏に、青と赤の血に染まった武士の姿が浮かんだ。

命を預け合った戦友ゆえか、もうあの男がいないと思うと、やり切れなかった。

「頼政は、死んだらうな？」

「いや。意識は戻らぬが、まだ生きてはいる」

意外な返答に、広賢は喜びと安堵を覚えた。それでも、斜はずに構える癖は治らない。

「しぶとい男だ」

毒舌とは裏腹に、生きてほしいと強く願った。

「頼政の屋敷は、見舞い客でごった返しておるそうな」

ぼろ屋敷では一族郎党が頼政を囲み、必死の祈禱をあれこれ捧げているらしい。

「真摯な祈りは、時として理を超えた力を持つ。だが、鶴の毒を受けた者は例外なく死んだ。あの男がなぜまだ生きているのか、不思議でならぬ」

広賢と由良が死ななかつたのは、晴仁の部屋と鶴ノ森で怨に体が慣れていたからだろう。だが、頼政にそんな事情はないはずだった。

「わからぬことがいま一つある。鶴は最後にそなたを喰おうとして、やめた。なぜだ？」

広賢は、あのまま喰われて死ぬと確信していた。最後には、鶴と目まで合った。

「鶴に聞いてくれ」

「ふん。地を這う虫にも、空飛ぶ鳥にも、水を泳ぐ魚にも、魂はある。現世に肉体を持って生きる異形にのみ魂がないと考えるのも、変か」

鶴は野獣と同じく本能のまま動くのか。それとも魂を宿し、意思を持っているのか。

「早良親王の怨霊さわらだと信じる者が一番多いがね」

今回の鶴退治は、功名目当ての連中と同じく私闘と扱われるらしい。頼長も河内源氏を投入したため、家成と痛み分けになると付け加えてから、泰親は続ける。

「ろくに事情も知らぬくせに、好き放題にのたまうのが都人だ。哀れ摂津源氏は、また貧乏くじを引かされた」

頼政は人望がないため兵も集まらず、名もなき陰陽師と共に野武士を雇って鶴退治に挑んだものの、あっけなく敗れた。懲りない馬鹿だと、笑いにされているらしい。頼長と手打ちした家成が、保身のために元興寺がこせに流させた噂か。

「関白がいよいよ動き出した。鶴を倒すと豪語している」

しよせん頼政と広賢は、いや家成も頼長も、忠通が見事に鶴を退治してみせる檜舞台ひのきふたいを整えてやっただけか。愚痴が続く。

「公卿たちは何もせぬくせに、文句だけは言う。人の足を引っ張る。世が悪くなっても、自分と関わりがなければ、すべて他人事だ。陰陽師たちとて、同罪だがな」

公卿に寄生する陰陽師に自浄は不可能だ。三百年続いた政を変えられるとすれば、全く別の勢力、例えば頼政のような武士たちかも知れない。

「当代賀茂家の陰陽師は雑魚ばかりだ。鶴を倒せはせぬ。つまり、布留部ふるべが出て参る」

一人語りを続ける泰親が、扇いでいた鉄扇をパチリと閉じた。

「私もこの間、遊んでいたわけではない。調べるうち、面白い話が二つ見つかった。鶴の謎を解く手掛かりとなるかも知れん。聞きたいか？」

「話したいであろうが」

泰親は苦笑してから、真顔に戻った。

「二十四年前の大治二年（一一二七）二月、知つての通り、陰陽寮が焼けた」

あの頃は中務省に入ったばかりで、広賢もずいぶん迷惑したものだ。

「真夜中で死者も出なんだゆえ、宿直の部屋から火の手が上がったと記されるのみだが、真相は違う。あれは付け火だ。おまけに、実際の火元は例の半地下の一室だったらしい」

「ほう」と応じると、泰親が身を乗り出してきた。

「実は、骸が数体あったのだ」

泰親が焼け跡を始末した清目を捜して聞き出したところ、死んで間がない遺体には臓腑がなかったという。

「当時、蔵人を務めていたのは源仲政。頼政の父親だ。あの男は豪胆なくせに、やけに異形を怖れている。いわくがあるとは思わぬか」

初めて会って口論した日、頼政は異形がいると言い張り、己が刀で斬つたと言っていた。

「いま一つ。保延二年（一一三六）九月、陰陽師が春日若宮祭に駆り出されたのを覚えていよう」

「あれから、もう十五年か」

当時、広賢は天文博士として陰陽寮にいたが、新祭の創設にあたり、大掛かりな祭式を準備すべく、大和国の春日大社にひと月余り滞在していた。無事に成功し、今では恒例となっている重要な祭式だ。

「揉み消された事件だが、ほとんどの陰陽師が出払っていた禁裏で、実は異形を巡る騒動が起こった。若宮祭挙行前日の朝、雷鳴壺で臓腑を喰われた人間の骸が転がっていたのだ」

安倍本家の陰陽師たちには「呪いだ、祟りだ」と日々、山のように訴えが寄せられる。話の辻褄を合わせるべく、いちいち丹念に記してあるのだが、その記録の山から見つけたという。

「当時を知る者たちから話を聞いた。口を濁す者もいたが、嘘ではない」

その日は新祭のために、蔵人所も多くが出払っていた。留守居の蔵人が事件の処理に当たったが、祭りの後、皆が帰還すると、静かに職を辞した。

「寿ぐことほべき祭りの裏で、怪異が禁裏を襲い、穢ことほされていたとなれば一大事ゆえ、すべてなかったことにされたのだ。貧乏くじを引いたその蔵人は、官職を得てまだ二カ月であつたという」

「まさか、頼政か？」

「然り。つくづく異形に魅入られた男よ。頼政から当時の話を聞き出せば、鶴退治に役立つやも知れぬと思うてな」

泰親は檜扇をパチリと閉じると、後ろから袱紗ふくさを取って開いた。

「具合がよくなったら、気散じに吹いてみたらどうだ？」

すすだけ 煤竹にとつまき 籐巻のひちりき 箆ひだ。

「気が向かぬ」

「向いたらでよい。昔はそなたが一番上手だった」

雅楽を愛した晴仁は、自らは龍笛を好み、弟や若い親族に楽器を贈っては、自分と合わせるよう求めた。サムハラサムハラの道にのめり込む晴仁にとって、唯一の楽しみであつたらうか。上手ではないが、陰陽術の講義の後、泰親の笙しょう、晴仁の龍笛と三人で合わせて楽しんだものだ。兄にもらつた箆ひは釣殿に大切に保管してあるが、ずっと触れていなかった。

「さてと、私は京へ戻る。そなたはゆつたりと静養いたせ。鶴について何かわかれば知らせる」
立ち去ろうとする泰親を、かすれ声で呼び止めた。

「中原は、立派に戦った」

泰親の背から、ぼそりと答えが返ってきた。

「あの者の死を、無駄にはせぬ」

中原は自らの意思で戦いに身を投じたが、それは泰親のためでもあつたらう。義理を果たすとともに、危ない橋を渡れぬ主に代わって、勝利した場合の名誉に与ろうとしたのだ。あずか

泰親が去ると、隣から由良の小さな声がした。

「頼政さまも泰親さまも、信じてよいと思います」

かつて広賢と泰親が信じた布留部は、宿敵の賀茂家と結んで安倍家を一手に収めようとした。

泰親は本家を取り戻した後、広賢を図書寮へ左遷した。理由さえあれば、人は幾らでも豹変し、裏切る。だから広賢は、もう人を信じないと決めたのだ。

「生意気を言うな」

「ごめんなさい。……先生も、わたしも、生きていてよかった」

広賢はあの時、由良の代わりに死のうとした。そんな自分が不思議だった。

「お前のおかげで、助かった」

広賢は天井を見たまま、口にしてみた。

「先生、お手を」

甘え声がした。板の間に左手を滑らせると、熱い手とぶつかった。

細い指をからめてくる。

広賢は重い頭を左へ向けた。

隣の褥にある由良の面立ちは毒々しい邪気を帯びて、薄紫色の彫像のようだった。

それでも美しい、と思った。

2

家成の屋敷の釣殿は、池を渡る風のおかげで、暑気もずいぶん和らぐ。

この二カ月、頼政は長らく自邸で療養し、まだ歩くのも大儀だった。それでも、家成から快気祝いに美味を共にしたいと招きがあったため、元興寺の用意した牛車に揺られて、先ほど四条大路に着いたばかりである。

(わしは幸せ者じゃわい)

頼政は螢火がくれた文の匂いを嗅いだ。

かんしょう

甘松の香りは、森の中にいるように地味な味わいだ、そのぶん飽きが来ない。

鶴退治の失敗を知った螢火は、頼政の身を案じる手紙を三度くれた。昨日届いた文では、怪我の快癒を心から願い、九月には会えるだろうかと記し、最後に歌が一首、添えられていた。

～
深山木みやまぎの　その梢とも見えざりし　桜は花にあらはれにけり

葉を落とした冬山の木々は、どれがどれとも見分けがつかないけれど、花が咲けば、どれが桜

かわかります。きっと頼政さまも出世できますよ、と励ます歌だ。深山木が頼政の愛刀で、桜が逢瀬の場所だから、ふたりにだけわかる意味合いもあった。螢火はこれまでも頼政の助けを得ながら幾首か詠んだが、会心の出来栄ではないか。

頼長方だからあえて詮索しないが、螢火の文は日没後に、長身の中年の家人が黙って届けにくる。内緒のやりとりなので返事は無用にと書いてあったが、どのみち大蛇の牙が貫通した頼政の右腕は、まだうまく動かせなかった。

(まさしく怪我の功名じゃな)

今月朔日さくじつの夕刻には、螢火が見舞いに来てくれた。

主の恋についてあれこれ噂していた家人たちも、頼政の想い人にじかに接して好意を持ったらしい。朗らかで美しく、落ち目の武家の棟梁に変わらぬ誠を尽くす姿を見て、隼太も、螢火なら嫡妻によいのではと認めていた。

(この調子なら、来月にはまた会える。楽しみじゃわい)

頼政は、薬師も驚くほど順調に回復していた。

七月は現れなかったものの、一昨日の十五夜は鶴が現れ、腕自慢の野武士たちを十人以上も喰ったと聞いた。

次こそ、鶴退治を成し遂げる。摂津源氏の名誉を挽回し、螢火を嫁に迎えるのだ。

渡殿わたどのをゆったりとした足取りで歩いてくる烏帽子が見えた。

「おう、博士！ お主も呼ばれとったんか」

頼政は釣殿の手すりから身を乗り出し、左手を振る。

「お互いに、幽霊ではないようだな」

ふらりと入ってきた優男は、以前より物腰が柔らかくなったろうか。

広賢は死と隣り合わせの戦場に、最後まで踏みとどまった。敗北したとはいえ、共に命懸けで鶴に挑んだ戦友だ。最初は行き違いもあったが、今では強い絆を感じていた。

「塩梅はどうじゃな？ 由良もようになったのか？」

答えを示すように、広賢はふらつきながら着座した。

顔面は蒼白で、肌もまだ少し紫がかったている。

「二人とも本調子ではないが、昨夕京に戻った。隼太も大事なかつたようで、何よりだ」

隼太は虎の後ろ脚で蹴り飛ばされ、気を失っていたものの、ひと足先に床を離れていた。

「中原が身を投げ出して、隼太の代わりに大蛇に噛まれたそうなんじゃ」

「人はしばしば、死んでから評価されるものだ」

広賢が檜扇を開いて扇ぎ始めた。

寂しそうな顔で、夏の終わりの空を見ている。

バタバタと透渡殿がにぎやかになり、小柄な体が毬のように釣殿へ転がり込んできた。

「二人とも、よう参った。過日はご苦労じゃったな。今日は労いねきりのために、ささやかながら一席

用意した。元興寺、始めさせよ」

さっそく家人たちが整えた趣向は、削氷けずりひである。

昨冬から氷室ひむろに貯蔵していた氷を砕き、甘葛あますらをかける氷菓子こおりがしで、公卿以上の人間のみが楽しめる贅沢だ。

「おお、わしは初めてでござる！」

頼政はさつそく匙さじですくい、口の中へ氷の綿を入れた。

サツと、涼やかで、ほどよい甘さが広がる。

味わいながら、夢中で平らげた。

「美味で、体も涼しゆうなるとは、極楽じゃ。中納言様、お代わりをください」

「元興寺、すぐに用意させい」

広賢もまんざらではない様子で、すでに平らげていた。

真夏の氷が奏でる至福を堪能し終えると、家成は二人を順繰りに見ながら、言葉を選ぶように続けた。

「先だつての戦いにつき、あれこれ云々うんぬんする輩はおるが、磨はそちたちを誇りに思っておる」

頼政が臥せっている間、家成はじきじきに見舞い、火の車の摂津源氏を支援してくれた。

「鶴禍やかはひどうなる一方。帝のお加減も優れぬままじゃ。鳥羽院にそちたちの戦いぶりをお伝えしたところ、いたく感じ入られたご様子でな」

「黒天狗の正体は？」

広賢が冷ややかに口を挟んだ。

あの邪魔さえ入らねば、何とか鶴の首を刎ねられたはずだ。

「まだ尻尾は掴めんが、磨は関白の手の者と見ておる。じゃが、安心せい。次は北面の衛士えじも動員して、手出しはさせぬ。帝と院のご期待に背いてはなるまい。次の九月はまだ戦えんじやろが、十月にいま一度挑む。よいな？」

「合点でござる！」

頼政は力強く即答したものの、腹の傷に力が入り、ウツと顔をしかめた。からから笑う家成を、広賢がぶつきらぼうに遮った。

「身どもは御免でござる」

「何じゃと？ まさか鶴退治を諦めたんか？」

頼政に続いて、家成が詰め寄る。

「時期尚早と申すか？ この調子じゃと、半年後にはどんな化け物になつとるか知れんぞ」

一昨日、犠牲になった者の骸は幾つにも切断されていたらしい。虎の爪がさらに大きく、鋭くなったのだろう。

「有馬でも鶴の倒し方を思索し続けておりました。十五夜を待つは下策。もっと簡単に討ち取る手立てがござる」

「おお、鶴ノ森を攻めるんじゃな。じゃが、巢は見つかつたんか？」

頼政が口を挟むと、広賢は黙って懐から絵地図を出し、広げた。

「あの森にはおらぬ。鶴が棲んでいるのは、ここだ」

広賢の細長い指が図中の清涼殿を差すと、頼政と家成が同時に声を上げた。

「鶴ノ森に湧いた雲は黒き虹を作り、最後に禁裏の上空で消える。人間は息を吸い水を飲むが、鶴にとっては、怨こそが生きるための力なのだ。ヒョーヒョーという音は鶴の鳴き声ではない。怨を体内に取り入れる時に喉が発する音のようだ」

「わしは蔵人所の仕事で禁裏を警固して参った。許しを得て屋根裏も蔵も調べたが、鶴らしき姿

はなかつたぞ」

「私はさしあたり、次のように見立てている」

冥界と現世を行き来できる異形は、人間と全く異なる生き物ながら、人間が赤ん坊から大人になるように、成長する。人間は日光と空気と食べ物により育つのに対し、異形は月光と怨と臓腑により育つ。

サムハラの術は怨を用いて異形を創り出すが、怨は日光により浄化されてしまうため、生命の源である太陽の力は使えない。

「ゆえに布留部も、夜にしか術を使わなんなのじゃな」

「然り」と家成に頷き、広賢は続ける。

異形は日光の代わりに月光を必要とし、最も強い、満ちた月影を浴びる。成長に従い、必要な怨も臓腑も増えてゆくわけだ。

「異形は日の光の下で生きられない。ゆえに昼間は冥界にいるか、現世にいるなら別の姿で命を保っているはずだ。鵺は四つの生き物から成る。『山海経』せんがいきょうに記されし九尾狐狸きゅうびこりのごとく、狸は化ける力を持つゆえ肖あやかつたのであろうが、幾つもある鵺の能力のひとつは、変化へんげに相違ない。鵺は人間の姿で禁裏に紛れ込んでいる。禁裏で臓腑のない犬や人間が転がるのは、決まって十五夜に鵺が臓腑を喰えなかった月だ」

十五日夜に、雨や曇りで月光が得られないか、あるいは満腹だった月か。

「では、博士。多子たし様が鵺じゃという噂は真なのか？」

笏をぎゅっと握り込む家成の隣で、頼政が問うた。

「百の噂に一片の真実が紛れ込む時もある。鶴は二后じゆだいの入内後に現れるようになった。帝のお体が優れぬのは、怨に触れておられるためであろう」

「実は、帝も薄紫の肌をしておいでらしい。おいたわしきことに、怨に毒されておわすのじゃ。

帝こそは美福門院派の要。帝の御身に万一の事あらば、待賢門院派の勝利となるう。確かに、すべてが悪左府の悪巧みで、指御子と河内源氏の失敗も目くらましましたと考えれば、辻褄は合う」

家成の言葉に、頼政は背筋が寒くなった。

恐らく螢火は何も知らず、多子のために不審な動きをしているのだ。螢火の具合が優れないのは、間近で日々、異形の怨に接しているせいだ。

「怨はわれらの想像も及ばぬ力を持っており申す。このまま捨て置かば、鶴は誰にも倒せぬ魔物となりましょう。されば、中納言様。腹を括られませ」

広賢は硬い顔で重々しく続けた。

「宮中にて、鶴と化す前にその者を討つべし」

眉根を寄せて黙り込む家成に代わって、頼政が口を開いた。

「じゃが、本当に多子様なのか？ いかにして見分ける？」

「サムハラサムハラの術によるのであるうが、人間に化けている間、鶴は邪気を発しないようだ」

靈感の強い泰親が禁裏を調べたが、鶴のような強い邪気を感じなかったという。

「鶴の血は青い。人間に化けていても、怨の力で生きている異形の血は青か、せいぜい紫。血を見れば、容易にわかる」

しばし呆気にと取られていた様子の家成が、から笑いをした。

「無茶を申すな、博士。やんごとなき方々とそれに仕える者たちの体を傷つけて、血を取れども申すか。血は穢れじゃ。ありえぬ」

「女性なら、月の物の色を確かめれば、わかりましょう」

「さように無礼な真似はできません。鶴は禁裏に棲んどります、御后様おきさきやも知れませんなぞと、磨が言えると思うか？ 先だって鶴と戦ったそちたちの血も、青くなつたはず。ならば誰が鶴なのかも定かとは言えまい。鶴の姿で討つならともかく、御后様を弑しいし奉れば、朝敵じゃ」

公卿といえども、後宮へは簡単に入れない。よしんば鶴らしき人間を見つけ出して処断したとして、誰が納得しようか。呪詛をしたと疑いをかけて陥れる類と同じだ。鶴の体をした異形を討たねば、鶴退治とは認められまい。

「このままでは、帝のお命が危うござるぞ」

広賢が口にした殺し文句で、家成は沈黙した。

「……思案しておくが、宮中の話と関わりなく、そちたちは鶴退治の支度を進めい」

家成は不機嫌を隠さず、話題を変えるように元興寺を呼んだ。

「布留部について、その後わかったことを申せ」

「はっ。かの者は宋の国で、古い獣骨を集めておった由」

一丈（三メートル）を超える虎や、五丈（約十五メートル）を超える大蛇の骨を求め歩き、さらには、太古に棲んでいた一丈を超える猿の骨も持ち帰ったという。

「怨を生命の源とし、現世と冥界の狭間で生きる異形は、われらの知る理に囚われませぬ。成長を終えた鶴は、げに恐ろしき魔物となりましょう」

「博士。鶴の正体は、行方をくらましておる布留部ではないのか」

平安京を手分けして搜索してきたが、それらしき者は見当たらないという。

「まだわかりませぬ。いずれにせよ、鶴と正面から戦うなら、今度こそ相応の支度をせねばなりませんまい。またしばし、京を不在にいたしまする」

広賢が去ると、釣殿の暑気が増した気がした。

「政にも、歌にも、女にも、美食にも興味が無い。あの男は鶴を退治するために生まれてきたのやも知れんな。さてと、鷹は政争じゃ。悪左府がいろいろ仕掛けてきおるでな」

家成はすっかり解けた削氷の水を、器からガブリと飲み干した。

3

鳥羽離宮の広大な苑池えんちを渡る風は、もうすっかり秋のそれだ。

家成が手持ちぶさたに檜扇で膝をパシリと叩いた時、元興寺が客人の来訪を知らせてきた。

「まったく、ひどい目に遭おうたわい」

呼びつけた頼政と広賢の顔を見るなり、家成はまず愚痴をぶつけた。

「こたびの狼藉ろうせきは、腹に据えかねまする」

頼政は義憤に駆られた様子で、鼻息が荒い。

十日前、頼長の家人たちが家成の家人と口論に及んだ末、屋敷を襲撃し、手当たり次第に物を壊して去った。家成は鳥羽離宮へ逃れて事の次第を院に訴え、そのまま金剛心院こんごうしんいんの舎屋やかすに身を寄せていた。

「中納言様、小なりとはいえ、摂津源氏がお力になりますぞ」

頼政はともかく、院の下命で平氏が挙兵すれば、戦となろう。

「騒ぐな。それが関白の狙いよ。悪左府は掌上で踊らされておるだけじゃ」

明石あかしから戻ったばかりという広賢は無表情だが、頼政は怪訝そうに丸い目を見開いた。

「そもそもこたびの諍いさかいは、両家の家人が七月に起こした揉め事が発端じゃそうな。元興寺に調べさせたが、家中で心当たりはなかった。代わりに、争鬪をけしかけた長身の乱暴者が浮かび上がってきた。すべて、そやつの仕事よ」

今回の事件の黒幕は、関白忠通だ。

忠通は頼長をけしかけ、院第一の近臣たる家成邸を襲撃させた。院に、頼長を見限らせるための荒療治である。同じ美福門院派として当面は味方のはずだが、忠通は容赦しない。頼長もろとも家成も追い落として、独り勝ちを収める狙いだろう。

「されば、忠通卿と事を構えるのでござるな？」

鼻の穴を膨らませる頼政に向かい、家成は檜扇を小さく横に振った。

「頼政よ、覚えておけ。脅しに屈して身を守るのも、立派な処世じゃ」

美福門院派の家成としては、宿敵の頼長に潰される前に、忠通の軍門に降るしか道はない。

「して、忙しい子どもと呼ばれたのは？」

広賢が面倒くさそうに口を開いた。

「関白が見舞いの使者を寄越して、鶴退治を申し出てきた。こういうややこしい時は、鳴りを潜めておるに限る。されば今日より、鶴は関白に任せて、麿は手を引く」

八月は十五名が喰われたせい、三日、九月の十五夜には鶴が現れなかった。

「鶴に手出しは無用ぞ。あの恐ろしい異形を、誰かが倒してくれるんじや。ホツとしたわい」

「中納言様、お待ち下され」

あわてて両手を突く頼政を、家成は檜扇で制した。

「院におかれても、関白に任せよと仰せになった。よいな？」

不満顔の頼政に、家成は念を押す。

「麿は、鶴よりも関白のほうが怖い。この後、忠通卿と会うのじや。黙って従え」

「されど、中納言様にいかなる非が——」

「畏まってござる」

広賢が頼政を遮って、両手を突いた。

「かつて安倍晴明がサムハラを禁じたのは、創り出した異形に愛弟子が殺されたためだとか。関

白殿下に鶴を倒せばよろしいが」

広賢は立ち上がり、頼政の腕を掴んで共に去った。

家成が苑池越しに、鳥羽津へ入ってくる舟をぼんやり眺めていると、元興寺が忠通の来訪を知らせてきた。鳥羽院のご機嫌伺いと称しながら、避難中の家成を従わせるために乗り込んできたのは明らかだった。

「こたびは災難じゃったのう」

口先だけの見舞い文句に対し、家成は笑顔を作り、心にもない礼で応じた。

「麿は今しがた、不届きにも頼長めが当今を廃し奉らんと策謀を巡らせておる旨、院に奏上して参った。院は近く、わが父を鳥羽へ呼ばれ、ご懸念の向きを伝えられよう。鶴一匹退治できぬくせに、世を治める資格などあるまいて」

両手を突く家成を、忠通が見下ろしていた。眼差しは、刺すように鋭い。

「……ごもつとも」

頼長は着々と追い詰められている。いずれは異図ありとされ、政から除かれるに違いない。

「久しぶりにご尊顔を拝したが、帝のご病状につき、院は御心を痛めておわしたぞ。院近臣として、そちは責めを感じぬのか？」

「まこと、不甲斐ない仕儀にて……」

「力なき者たちに任せてはおけぬでな。鶴からお守りするため、麿が帝を中宮呈子様とご一緒に
お預かりすることとした」

「何と……」

してやられた。

今ごろ忠通の真の意図がわかり、家成は背筋が寒くなった。

鶴からお守りする名目で、帝の身柄を奪うつもりだったのだ。皇后多子から帝を遠ざける巧み

な政略でもある。忠通の娘である皇嘉門院聖子は帝の養母にして、上皇（崇徳天皇）に入内した

皇太后におわす。忠通は、鳥羽院と対立する上皇をも持ち駒としており、いつでも美福門院派と

縁を切れるわけだ。鶴を最も上手に利用しているのは、忠通だ。もしや多子でなく、呈子こそが

鶴の正体ではないのか。

「十五夜に鶴が現れると申すゆえ、やむなくその前日、近衛殿を里内裏このえでん さとだいらとし、清涼殿から秘かにお移りいただいた」

近衛殿は忠通の屋敷から近衛大路を挟んで向かいにある。

頼長と家成が屋敷襲撃でてんやわんやの隙を突いたわけか。……いや、違う。最初から騒擾そうじょうを起こして、その間に事を運ぶ肚だったのだ。

「幸い帝は、いと健やかにやすお寝みじや」

忠通は薄笑みを浮かべながら、家成を見た。

完敗だ。家成の政略など、忠通の足元にも及ばない。役者が違った。

「されば、慌てずともよいが、鶴はわが手の者が討つであろう」

「畏まってございまする」

忠通が去った後、家成は腑抜けたように、鳥羽津を行き交う舟を眺めていた。

とにかく今は、生き延びるだけで精一杯だ。下手に動かず、忠通の意に従っていればいい。

4

土御門大路に面した安倍泰親邸は、池の中島のもみじが色づいている。

頼政は釣殿にあつて、庭池を泳ぐ鯉を目で追っていた。

歌の一首も浮かばない。不安でやきもきする心で詠めるはずもなかった。

九月は雨で流れたから、十月こそ螢火に会えると楽しみにしていたのに、宴ノ松原で待ちぼうけを食らったのである。秋晴れの日が完全に没するまで頼政は待ったが、やってきたのは罫ねぐしへ帰

るカラスの群れくらいだった。文も来ない。

恋心が募る一方の頼政は悩んだ末、その翌日、泰親を訪ねてみた。

螢火は待賢門院派の多子に仕える女官だから、頼めばうまく文を届けてくれまいかと考えたからだ。泰親は気まずそうな顔をして現れ、「先だつては色々あつて済まなんだな」と詫びたが、頼政は中原の死で帳消しだと考えていた。いつか頼政主従を門前払いした日から、中原が毎夜、鶴退治の成功を祈願してくれていたと聞き、涙ぐんだものだ。泰親に螢火との恋を打ち明けて頼み込むと、「何とかしよう」と請け合つてくれ、半月経った今日、泰親から呼び出しがあつたのである。

「頼政、待たせて済まなんだな」

相変わらず派手な出で立ちで現れた気障な陰陽師は、難しい顔で対座した。

「どうじゃった？ 文を届けてくれたか」

「いや、螢火なる女官はおらなんだ。偽名やも知れぬと、多子様にお仕えするすべての女たちを洗ったが、全員素性がはっきりしている。他にも当たって見たが、青の単衣ひとえに檜扇、二十歳前後の美しい女官などおらぬ」

「じゃが、宜秋門ぎしゅうもんを出入りしとるんじゃぞ」

「広い宮中で、われらの調べの届かぬ女たちがいる。わかるであろう」

「呈子様に仕える女官たちか」

「然り。朔日さくじつの夕刻に出入りする女官について蔵人頭にも尋ねてみたが、知らぬと言う。門番も首を横に振る。関白が口止めしているのであろう。私に分かるのはここまでだな」

螢火は多子でなく、呈子に仕えているのだ。

なぜ嘘を吐いたのか。先だって家成と会った際、呈子こそが鶴ではないかと言っていたが、螢火の具合が優れなかったこととも、辻棲が合う。

「いや、恩に着る。よう調べてくれた、御子」

螢火が呈子に従ったなら、里内裏さとだいらにいるはずだ。家成さえ怖れる忠通の手の内にあるとすれば、会うのは容易でない。うまい手はないものか。

思案していると、泰親が少し声を落とした。

「怪しい女だ。私なら、近づかぬがな」

「敵であれ味方であれ、惚れた以上は、恋を貫くのがわしの流儀じゃ」

「ならばこれ以上言うまい。ところで、そなたは昨夜、辻に行かなんだようだな」

「鶴から手を引くと、中納言様に口酸っぱく言われとるんじゃ」

体も完全に復調していないから、隼太とも相談して、あわわノ辻へ出向かなかった。鶴退治に失敗したとは聞いていたが、まだ仔細は知らない。

「検非違使けびいしの調べでは、十七人が喰われた」

忠通が家成へ通告した後、最初の十五夜だったが、関白として表立った動きはなく、これまで同様、命知らずの野武士や唱聞師しょうもんじたちが鶴に挑み、敗れたらしい。

「命以外に失うものもない、哀れな連中だ」

「いや、あの男たちにも、子や老母がおったろう。愛する女がおったやも知れん」

胸が痛む。自ら望んで危地に身を晒さらし、立身出世の夢と引き換えに敗れたのだ。

「中原にも、帰りを待つ家族がいた」

泰親が真紅の鉄扇をギュツと握り締めながら、立ち上がった。

「左府様としては、関白の鶴退治を成功させるわけにはいかぬ。だが、失敗すれば、私に退治せよと再び命が下るであろう。次は命を拾えまいな」

泰親は寂しげに苦笑した。

頼政は今日も、里内裏とされた近衛殿の周りを巡ったが、平氏の武者たちが物々しい警固をしており、中を窺い知ることではできなかった。

螢火がいるとしても、二度も鶴退治に挑んだ頼政が、呈子の住まう屋敷へ下手に文など届ければ、螢火の身が危うくなるやも知れぬ。ともかく家成と忠通の仲がギクシヤクしている今は、避けたほうがよさそうだ。泰親から話を聞いて、この十日ほど野良犬のように里内裏を回ってきたが、やはり螢火からの連絡を待つしかないと考えていた。

秋晴れの空を見上げて、頼政はふと思ひ立ち、ほっしょうじ法勝寺を目指した。

真つ赤な八角九重塔が平安京の青空に向かって屹立する姿を見上げるたび、頼政は人間の卑小きつりつさを思い知る。

(如来様。わしはこれから、どうすればよいのでござるか?)

東国で武士として人を傷つけ、殺める生業に心を痛めて以来、頼政は神仏に救いを求めるようになった。地蔵菩薩のほか、この塔におわす金剛界五仏では、阿弥陀如来を深く信仰していた。

ゴロリと池畔に寝転がって、吸い込まれそうな青空を見上げた。

ふだんなら気の利いた歌の一首でも浮かぶのに、思いは千々に乱れるだけだ。

(螢火は、嘘を吐かされとるんじや)

きっと何か事情があるのだ。ただ、可哀そうだと思った。

呈子に仕えているなら、同じ美福門院派であり、障害は小さくなったとも言える。きっと転居のためにてんやわんやで落ち着かなかったただけだ。そろそろ文をくれるだろう。

池畔の草地で寝返りを打った時、人の気配がした。

「殿、やはりこちらにおわしましたか」

隼太が傍らに腰を落とす。

「昨夜、螢火殿からの文が届いておったそうでござるが——」

「まことか！」

頼政は飛び上がるや、隼太の手から手紙をひったくった。

逸る気持ちを抑えながら、開いた。

決して達筆ではないが、心を込めた丁寧な字は、紛れもなく螢火の筆跡だ。

本当は多子でなく呈子に仕えていること、今は里内裏にいるが、事情があつてすぐには会えないことが記してあった。嘘を吐いていたことを丁寧に詫び、十二月の朔日には宴ノ松原で必ず会いたいという言葉で締めくくられていた。

本来は歌の一首でも付けて欲しかったが、それどころではないのだ。里内裏では何かと勝手な違い、落ち着くまで女官たちの仕事も大変なのだろう。

頼政は想い人からの文を何度も読み返して、少し安堵した。だが呈子が鶴なら、螢火を救うた

めにも討たねばなるまい。もちろん螢火は、呈子が鶴だとは知らないのだ。

「最近、鶴のほうはどうじゃ？ 御子に聞いたが、今月もひどかったそうじゃな」

「御意。また人が喰われ申した」

二度も戦いに負けてから、隼太は元気がなかった。中原を死なせたのは自分のせいだと思っ
ているらしい。

「こたび関白殿下は、なぜか動かなんだ。鶴退治は容易でない。わしはもう一度、出番が来ると
思うとるんじゃ」

聳え立つ巨塔を眩しそうに見上げながら、隼太がぼそりと言った。

「殿、悔しゅうございますが、鶴退治はもう、諦めましようぞ」

「何じゃと？」

頼政は驚いて再び半身を起こした。

「われらは、すでに二度敗れました。鶴はますます大きく、強くなっておる様子。次は必ず命を
落としましょう」

いつそう兇暴になった鶴は、辻で殺した全員の臓腑をきれいに喰ってから、黒雲に消えてゆく。

「じゃが、捨て置かば、もっと被害が出るぞ」

「力なき武家が気を揉む話ではございませぬ」

「いつまでも武士や唱聞師たちが——」

「いや。もう、誰も手を出しますまい」

視界を奪う黒雲、猿叫。左右から襲う八本の爪。闇から突然現れる毒蛇。たちまち傷が治癒す

る異形の体。死ねば臓腑を喰われる。謎の黒天狗までいた。

「殿は無官の御身にて、いかなる責めもござらぬ。家臣として、主君を死なせるわけには参りませぬ。されば以後、拙者は鶴退治から手を引きます。御免」

頼政は呆然としたまま、池畔に取り残された。

立ち上がり、救いを求めながら高塔を見上げた。

この春以来、頼政は鶴退治にすべてを懸けてきた。二度負けたまままで、終わるといふのか。

摂津源氏の名も地に堕ち、一族郎党はますます生計が苦しくなった。笑いにされるのが不憫だからと先方が気を使つて、歌合せにもほとんど呼ばれなくなった。

(博士に会^おうてみるか)

広賢は長旅に出ているらしく、鳥羽離宮以来、会っていないかった。

頼政は高塔の阿弥陀如来に向かつて一礼してから、南門へ向かつて歩き出した。

5

遠くで物悲しい鹿の鳴き声でした。

平安京の西のはずれ、うすまひ太秦のこしりゅうじ広隆寺界限まで来ると、町の喧騒とは無縁で、笹ノ葉がそよぐ乾いた音が耳に心地よい。

「この辺りから、始めるか」

「はい」と応じた由良が、小さな磁器の深皿へ竹筒の水を注ぎ込んだ。

清き水は、目に見えぬ氣の流れを、人よりも知っている。

鶴の出現以来、広賢は由良を伴い、京における邪気の動きを調べていた。広大な平安京に蠢く邪気は、何者かの意図で操られているのではないかと疑念を抱いたからだ。

春に法勝寺の池で紫水晶を見つけからには、由良と共に、兄が日記に書き残した場所を改めて一つひとつ訪れ、虱潰しに確かめてきた。

地面へ置いた皿の水面が落ち着くと、由良が指差した。

「竹林の右手です。もう、わかると思っています」

目を瞑ったまま差し出された白い手を、握る。

「右の奥へ」

しばらく歩いたが、うっそうとした竹林が行く手を阻んでいる。

「このまま進むのか？」

「はい。真つすぐ」

藪漕ぎをしながら進んだ先に、楠の大木があった。竹林の中で、まず気付かない場所だ。

目を開けた由良が、木の根元近くの大きなうろを示した。

「その中です」

広賢がしゃがみ込み、うろの中を覗き込んだ。光が見えた。

手を伸ばすと、硬くすべすべした石がある。

両手で取り出してみると、見事な紫水晶だ。

「これで、四つ目ですね」

東は法勝寺の池、北は賀茂別雷神社の立砂の下、南西は西寺の塔の屋根裏にも紫水晶が置かれ

ていた。いずれも、長年放置された石ではない。近年のうちに、相応の験力のある陰陽師により浄化されていた。やはり布留部が絡んでいるのか。

「この場所なら、月光を浴びられそうだな」

うろの反対側から月光が差し込む造りになっている。

「誰が何のために、こんなに立派な紫水晶を置いたのでしょうか？」

広賢は懐の絵地図を開いて、平安京を凝視した。

朱で記された北、東、南西に西が加わり、四カ所となった。

「やはり五芒星ごぼうせいの形だ」

「それなら、残りの南東にもあるはず。綜芸種智院しゅげいしゅちいんでしようか」

「うむ。そして、平安京全体に描いた巨大な五芒星の中心は――」

言いかけて、広賢は寒気を覚えた。

「東三条ノ森です！」

絵地図を覗き込んでいた由良が叫ぶ。

鶴ノ森に邪気が集中するからくりがわかってきた。

紫水晶は孔雀石と異なり、邪気を祓う。サムハラサムハラの術を施しておけば、その力は極めて強くなる。五芒星の形に配置された靈石が持つ強大な破邪の力は、中心に向けて最も強く作用する。弾かれた邪気が鶴ノ森へ集中する仕組みだ。

元興寺によれば、布留部は鎮西ちんせいで奇跡を起こす〈夜の陰陽師〉と評されていた。不惑を過ぎてから突然に靈感が研ぎ澄まされる人間もたまにいる。サムハラサムハラの術を会得した布留部が五芒星の

仕掛けを作ったのか。

「配置をひとつ崩すごとに五芒星の力は弱まるが、石陣の力はすぐには消えぬ。すべてを封じるには、サムハラの術を解く呪じゆも調べねばな」

術の解法は絡み合った糸を解きほぐすのに似ていた。呪を掛けるのは簡単だが、解くにはかなり根気が要る。

「でも、先生。鶴は関白さまが退治なさるのでしょう？」

「人間の運が良ければな」

忠通が政争のために鶴と布留部を利用してきたとして、簡単に武器を手放すだろうか。それに、あれほど強力となった兇暴な異形を本当に操れるのか。先月の十五夜も鶴を野放しにしたのは、もしや鶴が関白の手に負えなくなったからではないか。

「先生、ここにも犬枇杷いぬびわがありますよ。実を取りますか？」

由良が指差す先には、黒みがかかった真紅の小さな実がたくさん生なっている。

失踪した兄の部屋には、干からびた犬枇杷の実が幾つも転がっていた。日記にも記述がある。

晴仁は実が生る秋に、犬枇杷のある場所を訪れていた。偶然ではあるまい。

「いや、もう十分だ。参るぞ、次は綜芸種智院だ」

紫水晶で作る五芒星の石陣を崩せば、鶴ノ森の黒雲は弱まってゆくはずだ。

しかし、ただ邪気が集まるだけでは、怨は生まれない。サムハラの術が使われて、初めて怨と化すようだ。鶴ノ森にも、何か仕掛けがあるに違いなかった。

(螢火、せつかくの日に降られてしもうたな……)

待ちに待った十二月朔日、冷たい雨に濡れる宴ノ松原に、青色の単衣は見当たらなかった。

「殿、日が傾いて参りました。早く武徳殿へ」

隼太に急せかされ、頼政は松林を抜けてゆく。

頼政はこのひと月余りを悶々と過ごした。

螢火を信じながらも案じ、何もしてやれない自分を齒痒く思った。ふらりと広賢を訪ねても、不在がちだった。たまに会えても、調べ物のために取り込み中で、用もないのに来るなど門前払いされる日もあった。

先月も鶴は暴れ狂ったが、帝のおわさぬ禁裏は平穏らしく、蔵人所の代わり仕事も頼まれなかった。家成も泰親も多忙で、政争の状況もわからない。自然、螢火を思うわけだが、あれ以来、文は届かなかった。そして今日、たとえ雨でも会えると思っていたのに、日暮れ近くまで待っても、螢火は現れなかった。

(しよせんは片恋やも知れんな……)

あれほどの美貌だ。忠通を含め、里内裏で誰かに見初められても、何ら不思議はない。

隼太は鶴退治について一言も口にしなくなったが、螢火を嫡妻として迎え、地道に摂津源氏の立て直しを図るべしと、頼政の恋のために骨を折ってくれた。

螢火を悩ます事情を知る鍵は武徳殿にあると言い、泰親に掛け合って武徳殿への立入りにつき許可をもらってきた。家成は忠通、さらに呈子と繋がっているから、待賢門院派の口利きのほう

がよかろうと考えたのである。

螢火を裏切るようで、頼政は気が進まなかったが、危ない悪巧みに巻き込まれているに違いないと隼太が言うので、その気になった。

雨の中、昼下がりがりから宴ノ松原と武徳殿界隈を二人で歩き回っていたが、人通りはなく、野良犬を数匹見かけただけである。

わからぬことだらけだ。

鶴が多子でなく、呈子だったとして、螢火は武徳殿の地下で誰と会っているのか。

広賢は布留部という陰陽師を怪しんでいた。後宮に男は簡単に入れないから、螢火が手足となつて、呈子と布留部の間を取り持っていたと考えれば、どうか。

「敵が妖術を使う陰陽師なら、心して掛からねばなりませんまい」

想い人が隠す秘密を暴くのは気が引けるが、救い出せるとすれば、頼政だけだ。単身で武徳殿へ乗り込むのは危険だから、当然に隼太も同道した。

やがて、二人は武徳殿の正門に着いた。

「散位源蔵人^{さんい}大夫頼政と申す。今夕、立入りの許可を得ておる」

泰親の名を出すと、門番が頷いて先に立ち、地下へ繋がる長い階段を下りた。

途中で折り返し、建物の真ん中あたりで石段が尽きた。

「この地下には、よう誰か出入りしとるんか？」

「何もお答えできませぬ」

取り付く島もない答えは、宜秋門の門番と同じだ。関白に口止めされているのか。

頑丈な分厚い引き戸は施錠されておらず、ただ重いだけだった。

「こちらでございませう。後はご随意に」

紙燭しそくを借りて隼太と中へ入ると、丹田がヒヤリとした。

一本道の廊下は、石造りの土台がむき出しで、左右には土壁が続いていた。

「薄気味悪い場所ではございませう」

いや、邪気を感じる。鶴の時ほど強くはないが、丹田が重い。本能が引き返せと叫んでいた。

「異形でも出てきそうじゃのう」

主の遣いとはいえ、螢火はこんな場所で何をさせられていたのか。

「突き当たりまで行ってみましょうぞ」

長い廊下を奥まで歩く途中、ちょうど中ほどで頑丈な木の扉が向かい合っており、南京錠が下

ろされていた。

頼政は背筋に強い悪寒を感じ、覚えぬ身震いした。

「殿。いかがなさいましたか？」

「いま通った辺りが、一番ゾツとしたわい」

太刀の柄つかを握り締めながら歩を進めると、古い遣戸やりどがあった。真ん中に目玉のような木目があ

って、気味が悪い。

「もし、誰ぞおられるか？」

隼太が戸を叩いた後、戸に耳を当ててみるが、応答はなかった。

二人はうなずき合い、隼太がそつと戸を開けてゆく。

明かりが部屋の中を照らすや、身の毛がよだつた。

塗籠ぬりこめほどの広さの青い部屋には、白骨が所狭しと転がっている。

「博士なら、何ぞわかるやも知れんな」

図書寮ずしよは近くだ。もし広賢が出仕しているなら、今すぐ呼んでくれれば話が早い。最近は図書寮に閉じこもって古文書をひっくり返していたから、在寮していよう。

部屋を出て、廊下を引き返した。

(蛍火はあの気味の悪い部屋へ行っておったんじやろか。左右の武器庫とも思えぬが)

「変でございませぬ、殿」

行く手は真つ暗闇だ。さつき下りてきたはずの出入口が消えている。

突き当たりの遣戸には見覚えがあった。さつきと同じ目玉である。

振り返っても、奥は真つ暗だ。一本道の廊下で、迷うはずもなかった。

「まさか、さつきと同じ部屋なのか」

警戒しながら戸を開き、中を照らすと、白骨が転がっていた。散らばり具合も全く同じだ。

もう一度反対側へ行ってみたが、やはり白骨の部屋があった。戸を開けておいて、反対の部屋へ行くと、今度は戸が開いていた。

「隼太。わしがここで待つとるゆえ、向こうまで歩いて行ってくれんか」

「合点でござる」

隼太の持つ明かりは遠ざかって行ったが、いつの間にか近づいてくる。

「閉じ込められたな。誰ぞが術を施したんじやろう。骨の部屋に出口はないか」

二人で部屋に入って探したが、石の壁には明かり取り窓もなかった。

紙燭の火がふっと消えた。

真っ暗闇だ。

「おい、誰ぞおらんか！ 助けてくれい！」

頼政の声は、闇に吸い込まれただけだ。

「このまま飢え死にして、われらの白骨もこの部屋で何かの儀式に使われるのでござろうか」

「物事を悪い方に考えるな。どうしても出られぬ時は、さっきの錠を壊して、その部屋から出れ

ばよい。大内裏の建物じゃが、背に腹は代えられん」

「ここは地下でござるぞ。湿気を嫌う武器庫から外へ出口があるとは思えませぬ」

「あるかも知れんじやろ。とにかくこの部屋を出ようぞ。気味が悪い」

手探りで廊下へ出ると、二人は遣戸を閉め、壁を背に座り込んだ。

「門番が、わしらが戻らぬのを不審に思うて、助けに来てくれんじやろか」

「よしんば探したとしても、一緒に閉じ込められるだけではござらぬか」

「むう。されば寝るか、隼太。夜が明けたら、術が解けとるやも知れん」

雨で濡れた体は冷たかったが、動き回っているうちに乾いてきた。幸い地下は寒くない。

「隼太、もしやここが鶴の棲み処なのではないか？」

黒雲は大内裏まで届いている。鶴がふだん人間に化けているなら、ありうる話だった。

「布留部とやらが、かくも恐ろしき妖術を使いおるなら、捨ててはおけんぞ」

返事はない。隼太は鶴の話題を避けていた。

「鶴と命懸けで戦ってきたわしらしか、もう奴は倒せまい」

十一月の十五夜は、鎮西から上ってきた野武士たち二十二名が喰われた。関白が雇った連中だと噂が立ったが、鶴の災禍はひどくなる一方だ。広賢が懸念していた通り、鶴が暴走を始めたのではないか。

「わが摂津源氏は、昔から損な役回りだな。他の誰もせぬなら、できぬなら、やらねばならん。さもなくば、ご先祖様に申し訳が立たんじやろ。もしもここから生きて出られたら、天命よ。わしらで倒そうではないか。仇も討たねばならんぞな」

長い沈黙の後、ぼそりと返事があつた。

「どのみちここで落としていた命。助かれば、仰せの通りにいたしましょう」

「よう言つた！」

頼政は手探りで隼太の背をポンと叩きながら、大あくびをした。恋煩いのせいで、夜もよく眠れていなかった。

「して、殿。ここから出る策は？」

「何とかなるじやろう。交代で眠ったほうがよさそうじやな。先に寝かせてくれない」

「拙者はとても眠れませぬ。どうぞお先に」

頼政は廊下に大の字になるや、眠りに落ちた――。

やがて頼政は自分の鼾いびきで目覚めた。まだ真つ暗だ。

「隼太、起きとるか？ わしはどれくらい眠つとつた？」

「半刻ほどでございましょう。改めて確かめましたが、骨の部屋からも出られませぬ」
頼政は半身を起こして大きく伸びをした。

「ご苦労じゃった。まだまだ眠れるが、腹が減ったのう。おお、そうじゃ」

懐から出した餅餠（へいたん）を分け合った。螢火に会えたら一緒に食べようと考えていた菓子だ。

「名も成せず、かような所で命を落とすとすれば、残念無念でござる」

「眠って食って、力が湧いてきた。悪いが武器庫をひとつ、ぶち破らせてもらおう」

暗闇の中で頼政がぼきぼき肩を鳴らした時、かすかに人の声が聞こえてきた。

二人は立ち上がった。頼政は深山木の柄に手をやる。

廊下は暗闇のまま、声だけが聞こえる。女だ。

「先生、怨です」

「生まれ、泰親。その先にサムハラ（サムハラ）の術が仕掛けてある」

女の声は由良で、低音は広賢だ。頼政の心に安堵が広がってゆく。

「わかっている。こいつは厄介な結界だな」

舌打ちをしているのは、泰親だ。

「おーい、博士に御子。頼政じゃ。隼太と閉じ込められてしもうた。助けてくれい」

「下手に動くな。大人しくしている」

声は届くらしい。

夕暮れ、陰陽寮にいた泰親が、武徳殿の方角から強い邪気が立ち上るのに気づいた。頼政が地下に入ると知っていたから、図書寮の広賢に声をかけ、確かめに来たという。

「この先は強力な結界だ。由良、罨の場所がわかるか？ 慎重にな」

やがて暗闇の廊下に、光がぼんやりと浮かび上がった。

由良が松明を持っている。広賢と泰親が続く。

「この先です。行けるのはここまでです」

「空間をねじれさせて繋げているようだ。身どもには使えぬ高度なサムハラだ」

「それでも、表裏の陰陽術を合わせれば、解けるのではないか」

泰親は左で手印を作りながら、廊下を行きつ戻りつ、探るように歩いた。

広賢は腕組みをし、壁に寄りかかって眺めている。

「五気からすると、この辺りがよい」

広賢と泰親は十数歩離れて向かい合った。その間に由良が立つ。

へ ツキ月 フウンニ浮雲 エイセラル驛……

泰親はよどみなく朗々と咒を唱えた後、縦に四本、横に五本の九字を切った。

「遁甲とんこうの九星だ、広賢。……天逢てんぼう！」

二人は同時に笏を取り出して垂直に立てると、膝を高く上げて歩み始めた。

「天内てんない……天衝てんしょう……天輔てんぼ」

第一級の陰陽師だけあって、二人の動きは舞を踊るように軽やかだ。

「……天英てんえい！」

廊下の途中ですれ違う。今度は広賢が咒を唱えた後、二人はさらに六歩進んだ。さっと、廊下にさわやかな気が駆け抜けてゆく。

「出てもよいぞ。結界は解けた」

泰親の言葉に、頼政は歓喜の声を上げた。

「ありがたや。恩に着るぞ！」

泰親に抱き着く頼政をしり目に、広賢はするりと抜けて、奥へ歩いてゆく。

「何しろ気味が悪いんじや」

行き止まりの部屋の中を覗いて、泰親が苦い顔をした。

「昔見た布留部の部屋にそっくりだ」

「さっきの結界と言い、布留部は相当の験力を身につけている。昔の兄上をも超えていよう」

「厄介な敵が舞い戻ってきたものよ。思惑は知れぬが、関白がいよいよ鶴退治に本腰を入れてきた。来る師走十五日は、過去最大の見世物となろう」

「布留部とやらを討たんでよいのか？」

二人の会話に頼政が口を挟むと、広賢が応じた。

「サムハラの術を使う陰陽師を討つのは、容易でない。少なくとも頼政一人では無理だ」

泰親が頼政と広賢の肩へ手を置いた。

「待賢門院派の手の内は明かせぬが、布留部に対抗するために、そなたたちの力を借りたい。次の十五夜は、雅楽寮の部屋を用意する。実は家成卿からも手配を頼まれていてな」

五人が武徳殿の地下から出ると、すでに平安京に夜の帳とほりが降ろされ、空には星が瞬いていた。

(つづく)